
29歳のガールズトーク～ベルサイユのリン

alice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

29歳のガールズトーク〜ベルサイユのリン

【Nコード】

N5070Z

【作者名】

alice

【あらすじ】

ある日朝起きたら遅刻ぎりぎりの時間だった凜ちゃん。慌てて制服を着て家を出たはいいけど…。

(久美子)

「そついえばさあ、凜って女の子として生活始めたとき何の違和感もなかったの？」

(凜)

「ウーン、なかったわけじゃないヨ。たとえば女の子の服とか言葉遣いとか、最初は戸惑うことばかりだったし。」

(ミコ)

「そうだったネエ。凜は3ヶ月くらいは一人称が『ボク』だったし(笑) あ、服つていえばさあ…。」

(凜)

「あー！ ウンウン！」

(久美子)

「エー、なにになに？」

(ミコ)

「アハハ、思い出すネエ(笑)」

(凜)

「あのときは焦ったー(笑)」

(久美子)

「2人でなに納得しあってるのヨ。アタシにもちゃんと話さないヨー。」

(凜)

「ウーン、じゃあ(笑) じつはこんなことがあったのヨ。」

.....

それはアタシが中3になった4月のある日のことだった。

朝、目が覚めると

「わぁぁー！ー！　もう7時50分じゃん！　どーしょー、遅刻だぁー！」

ミコと一緒に青葉学院高等部を目指すことを決心し、アタシはその日から勉強勉強の毎日を繰り返していた。その日の前日も夜中の2時半まで勉強をしていて、前夜にかけておいた目覚ましのけたたましい音もなんのその！

朝起きたらなんといつもより30分も大寝坊してしまった。

しかも寝ぼけ眼の上に今週初めから生理が始まって頭はフラフラ状態。

アタシは重い身体を無理に引きずって、とにかく歯磨きと洗顔を済ませて、部屋のハンガーにかかっている制服をばさばさと着こみ髪をとかす。

「ああ、つら〜い…。」
机の横にあるカバンを手に持って1階にあるダイニングキッチンに降りていった。

テーブルの上にはすでにトーストとハムエッグ、そしてオレンジジュースが置いてあり、母親はキッチンで忙しそうにしている。

「凜ー、早く食べちゃいなさい。遅刻するわヨー。」
「わかってるー。　ああ、もうホントに間に合わなくなっちゃう。」

アタシは、目玉焼きを素早くおなかに流し込み、そして残ったハムをトーストの上においてトーストを半分に折ると、それを口にくわ

えてバタバタと玄関に急いだ。

するとキッチン奥の方から忙しそうにしている母親はこっちの方を向かないまま

「あ、今日はお母さん、午前中松戸のちーちゃんの家に行ってくるからネー。」

と大声で声をかける。

アタシは

「わかったー。じゃあ、行ってくるからー。」
と焦って家を飛び出した。

(ああ、もうあと12分かあ。間に合うかなあ…。)

家から学校までは普段歩いて15分はかかる。

アタシは息を切らせながら早歩きでスタスタと歩いた。

その途中、何人かの人にすれ違った。

誰も見知らぬ人ばかりなのに、男の人も女の人もなぜかすれ違った
びにアタシの方をチラッと見ている。

(なんだろう？ 口に目玉焼きの残りでも付いたままになっている
んだろうか。)

しかし口元に手をやって拭っても手にそういうものは付いてこない。
少し不思議に思いながらも、とにかくアタシは学校への道程を急い
だ。

(ああ、あと3分！)

やっと正門が見えてきた。

もう他の生徒たちは校舎の中に入ってしまっている様子。

そしてチャイムが鳴る8時15分
なんとかアタシは校舎のところに辿り着いた。

階段は2段飛びでピョンピョンと上がって行き、やっと教室の前。

そして

アタシはガラッと扉を開けて教室の中に入っていく。

ラッキー！

担任の山岸先生はまだ来ていない。

教室の中ではミコが久保ちゃんや奈央と席の近くに集まって談笑している。

そこにアタシは

「オハヨー！」と彼女たちに声をかけた。

すると

振り返ったミコたち3人はアタシのことを見てなぜかポカーンと口を開けて見ている。

「エ、なに？ ミコ、どーしたのヨ？」

アタシはハアハアと小さく息を切らせながらそう尋ねると

「凜…、アンタ…。」

「？」

「ど、どーしちゃったのヨ!? その格好! アハハハハ!!!」

ミコも久保ちゃんも奈央も、いきなり大きな声で笑い始めた。

「あわわわー！ー！ー！ー！ー！ー！」

(ど、どーしよー！ 間違っつて男の制服着てきちゃった！)

(そっつかあ、だから朝すれ違っつた人がみんなチラチラボクの方を見てたんだあー。)

じつはこの頃アタシは昔着ていた男子の制服を、中々捨てがたくつて、思い出のつもりで女子の制服の横にかけていた。どうも慌ててそれを着てきてしまったらしい。

「なんかすごくアンバランスなんだけど、そのアンバランスさがよけい艶かしいっていうか…。」

男子たちまでそんなことを言い始める。

「あああああ、困つたあー！ー！ー！」

それにしても久しぶりに切る男子の学ランはズシンと重かつた。

そのせいか肩が凝つてしょうがない。

アタシはせめて上着だけでも脱ごうとすると、Yシャツからはブラジャーの後がハッキリと透けてしまい、男子はなんとも目のやり場がなさそう。

男子はチラチラとアタシのYシャツに目を配らせている。

ジーッとは見ないけど、チラチラと目を逸らしながら見るからよけいゾクゾクしてくる。

(そ、そんな目つきでみるなああー！ー！ー！)

仕方がなくアタシはまたその上着を着るしかなかった。

そんなアタシを弄くるかのようにミコは

「まあまあ、とにかくもう先生来ちゃうし、席に着ごうヨ。 それ

にしても…ウプププ…。」

アタシは仕方がなく真っ赤になったまま自分の席に腰を降ろした。

するとそのとき

ガラツと扉が開き担任の山岸先生が入って来て、みんなはバタバタと自分の席に着く。

先生はそのまま教壇に登り

そこにクラス委員の井川さんが挨拶の号令をかける。

そして

先生が「皆さん、おはようございます」と言って顔を上げたとき、アタシとバツチリ目があつてしまう。

山岸先生はボーゼンとした顔でアタシを見ている。

「あ、あの…その…。」

なんて言い訳すればいいのかわからず口ごもっているアタシに先生は

「小谷さん！ ど、どーしたの？ その制服はっ…！」

「じつは…。」

アタシは真っ赤になった顔で朝のときの事情を先生に話した。

「なるほどネー。 まあ、それじゃしょーがないけど…。 それにしても…プププ…カワイイ…。」

（あーーーーーん！先生までーーーーー。）

それから多分この話は先生が職員室に戻って瞬く間に広がったのだらう。

他の先生が授業で教室に来るたびにアタシの方を見て必死に笑いをこらえている。

まるで地獄のような時間はゆっくりゆっくりと過ぎていく。

休み時間には他の女の子たちが

「ネー、写真撮ろうヨー。」とアタシを囲んで携帯の写メをパチパチとやる始末。

さて

しかし困ったのはトイレだった。

その日アタシはちょうど生理の真っ最中。

ナプキンを取り替えるためにトイレに行かない訳にはいかなかった。

そこでミコや久保ちゃんたちがアタシの付き添いで一緒に女子トイレに入る。

ところが中に入ると、そこにいる女の子たちは男子の学ランを着ているアタシに一瞬

「きゃあー！」と声をあげるが、しげしげとその制服を着ているアタシの顔を見ると

「ど、どーしちゃったのー!? 凜、その格好!」と言って驚き

そして、「カワイイー!」と囲い込んだ。

それから山岸先生がウチの母親とやっと連絡がついたのは10時を過ぎてから。

母親が女子の制服を入れたバッグを持って学校に来たのは給食の時間になってからだった。

そしてやっと女性の制服に着替えて教室に戻ったアタシに他の女の子たちはしきりに

「もったいなあぁーい！」

「もっと着ててほしかったのにいいーいーいー！」
と残念がる。

それからしばらくの間、アタシは他の女の子たちに『オスカル』と呼ばれていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5070z/>

29歳のガールズトーク～ベルサイユのリン

2011年12月17日02時55分発行